




病害虫発生予察情報予報第7号(10月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫(抜粋)
		平年比	前年比		
水稲(普通期)	トビイロウンカ	並	少	152~154	
	1. 紋枯病 発生が多く、一部では上位葉鞘への進展がみられる。各圃場での発生状況を確認し、病斑の進展が認められる場合には、直ちに防除を実施する。薬剤散布の際には、農薬の使用基準(収穫前使用日数等)を遵守し、周辺圃場への飛散防止に努める。				
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多	200~201 207~209	 ハスモンヨトウ
	カメムシ類	並	やや多	201~202 209~210	
1. ハスモンヨトウ 一部圃場で発生が多い。圃場ごとの発生状況を確認し、幼虫による加害が続いている圃場では防除を実施する。					
イチゴ(本圃)	ハダニ類	やや多	やや少	212~213	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	並	202~204	
	アブラムシ類	多	並	217~218	
	1. ハダニ類 一部圃場で発生が多い。薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。また、天敵カブリダニ剤を導入する場合は、天敵放飼前に天敵に影響の少ない薬剤を用いて、ハダニ類の寄生を0頭に抑える(令和3年9月10日付け病害虫対策資料第9号参照)。 2. 炭疽病 天井ビニル被覆時まで本病に対する薬剤防除を継続する(令和3年9月10日付け病害虫対策資料第9号参照)。 3. 次年産親株の病害虫対策 次年度作での炭疽病、萎黄病等の発生を抑えるため、健全親株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では優良原種苗等へ更新する。				
キュウリ	べと病	やや少	並	182~183	 黄化えそ病
	うどんこ病	やや少	並	180~181	
	褐斑病	並	並	185~186	
	アザミウマ類	やや多	多	195	
	コナジラミ類	多	並	194	
1. ミナミキイロアザミウマ: 黄化えそ病、タバココナジラミ: 退緑黄化病 既に黄化えそ病や退緑黄化病が発生している圃場がある。罹病株を認めた場合は、早急に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。未発生の圃場においても、媒介虫の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
アスパラガス	ハダニ類	並	並	312~313	 褐斑病
	アザミウマ類	多	やや多	314	
	褐斑病	やや多	やや少	313~314	
	茎枯病	やや少	やや多	316~317	
	斑点病	やや少	並	317~318	
1. 次作に向けた対策 本年は、褐斑病の発生が多くみられた。病虫害を次作に持ち越さないために、収穫終了後も定期的に防除を行い、病原菌および害虫の密度の抑制に努める。					
タマネギ	1. べと病 苗床での感染を防ぐため、育苗期から予防防除を行う。				
野菜共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ)	やや多	並	166~168 仔ゴ: 215~217 アスパラガス: 316, 319	 ハスモンヨトウ
果樹全般	果樹カメムシ類	並	並	250~253	 ツヤアオカメムシ
	1. 果樹カメムシ類 発生量や飛来状況は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合には、直ちに防除を行う。 ツヤアオカメムシは常緑樹の樹上で越冬する習性があり、カンキツ類の樹上でも越冬する。本虫が越冬のために飛来したカンキツ樹に果実が結実している場合は、果実を収穫するまで被害をうけることになるので、寄生状況に注意する。				
カンキツ	ミカンハダニ	やや多	並	226~227	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	234~236	
	1. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので収穫時に取り除き処分する。また、降雨時・結露時の収穫は避けるとともに、果実に傷をつけないよう丁寧に扱う。腐敗防止対策のための薬剤散布は収穫7~10日前に、霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。 2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前~前日までに必ず薬剤散布を行う。 3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。				
ナシ	1. 黒星病 翌年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却もしくは園外に持ち出し処分する。				
ブドウ	1. べと病 一部の園で発生が多い。本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却もしくは園外に持ち出し処分する。				
ブルーベリー	1. かいよう病 収穫後頃から、本病菌の増殖に好適な気温となる。感染を防止するため、発病の有無にかかわらず、全ての園において、収穫終了直後から銅水和剤による定期的な防除を実施する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	1. 赤焼病 赤焼病の病原細菌は傷口からの感染が多く、秋整枝により感染が拡大する可能性があるため、多発園では整枝直後の銅水和剤散布を行う。一般茶園においては、定期的な観察を行い早期発見に努め、発見した場合には治療効果があるカスミンボルドー等を散布する。 また、マシン油を散布すると発生が助長されるため、マシン油散布の3～7日前に銅水和剤を散布する。				
	キク	白さび病	並	並	380～381
アザミウマ類		並	並	385～386	
アブラムシ類		やや多	並	388	
ハダニ類		並	並	386～387	
ハモグリバエ類		並	並	390	
チョウウ目害虫		やや多	多	389 166～168	
1. チョウウ目害虫 一部の圃場で発生を認めており、また、10月の気温は高いと予想され、本虫の増殖に好適な条件となっている。薬剤の効果は、中齢以降の幼虫には低下するため、圃場観察で早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を実施する。					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害防除のてびき」も参照してください。

佐賀県病虫害防除のてびき掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321928/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～3 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
5 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

10 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 10 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 3 年 9 月 23 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 10 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	20 (19.1℃)	70	高い
降水量	40	40 (90.1 mm)	20	やや少ない

Ⅲ. 10月の予報

水稻（普通期）

定期調査：48 圃場
調査日：9月15日～22日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) トビイロウンカの発生状況

① 定期調査（図1参照）

発生株率2.8%（平年18.3%、前年50.9%）

平年比：やや少（～±） 前年比：少（-）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 中晩生品種（さがびより、ヒヨクモチ等）については、圃場での発生状況を確認し、幼虫を多数みとめた場合には、薬剤防除を実施する。

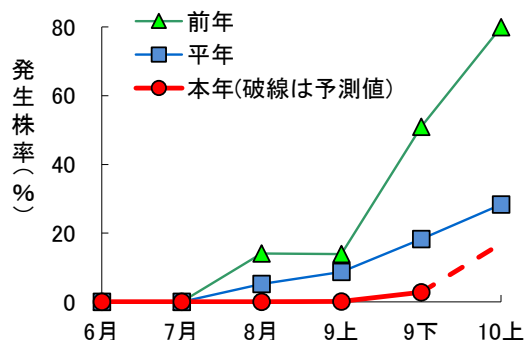


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

大豆

定期調査：22 圃場
調査日：9月15～22日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率4.4%（平年4.8%、前年7.0%）

平年比：並（±） 前年比：やや少（～±）

白変葉発生株率1.2%（平年1.1%、前年0.6%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

② トラップ調査（図2参照）【県内7地点】

平年比：やや少（～±）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

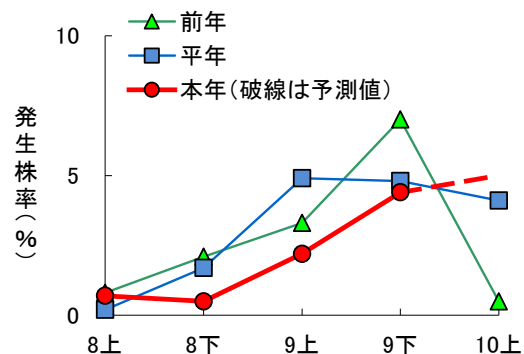


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

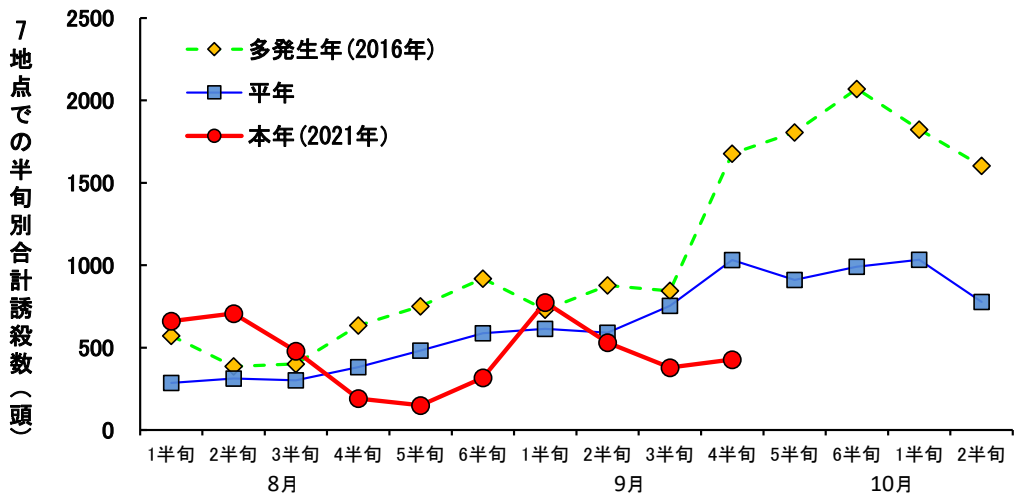


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数（9月4半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内7地点の平均誘殺数（ただし8月4半旬までは8地点の平均誘殺数））

2. カメムシ類（アオカメムシ、イモヅカメムシ、ホバカメムシ、ミミアカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率0.2%（平年0.3%、前年0.2%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 被害を防ぐため、莢の伸長初期から子実肥大中期の防除を徹底する。発生が多い圃場では、7～10日間隔で2～3回防除を行う。

(2) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

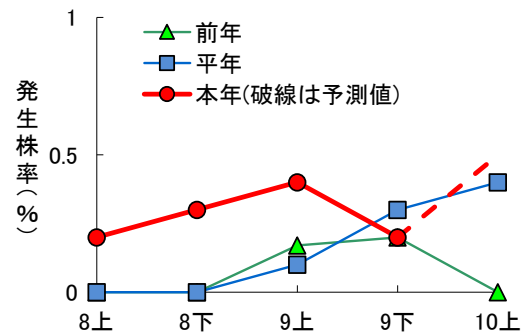


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

イチゴ（本圃）

定期調査10圃場、防除員2圃場
調査日：9月15～21日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：8.3%（平年6.3%、前年14.8%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

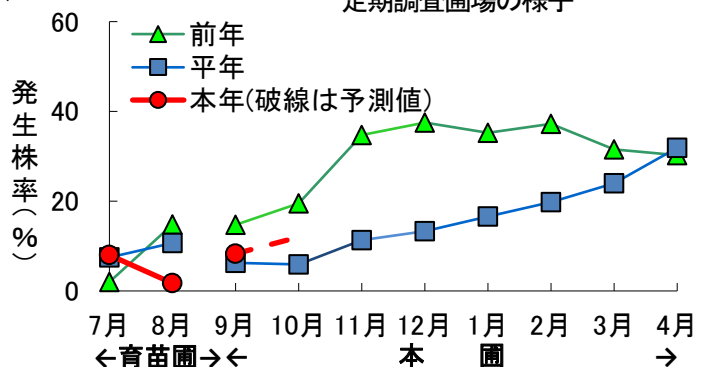


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：0.3%（平年1.7%、前年0%）
平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）
 - ② 10月の気象予報
降水量がやや少なく、やや少発生の条件（一～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。

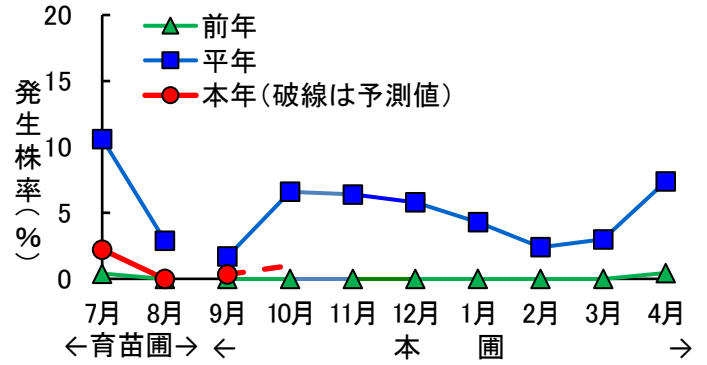


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：2.3%（平年3.2%、前年4.8%）
平年比：並（±） 前年比：やや少（一～±）
 - ② 10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。
 - (2) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

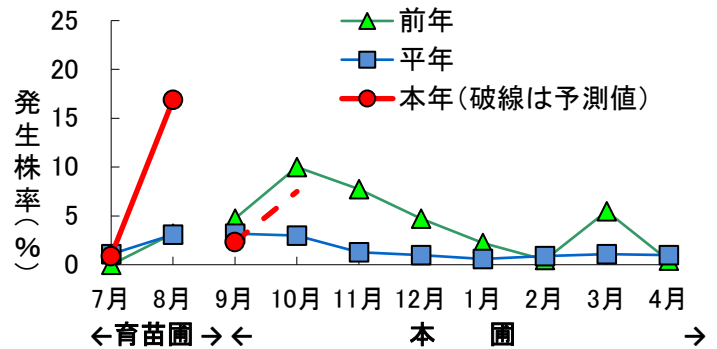


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

定期調査5圃場、防除員4圃場
調査日：9月16～22日



定期調査圃場の様子

1. ベと病

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 子苗での発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：1.1%（平年6.6%、前年0.6%）
平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）
 - ② 10月の気象予報
降水量がやや少なく、やや少発生の条件（一～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 適正な湿度管理に努める。

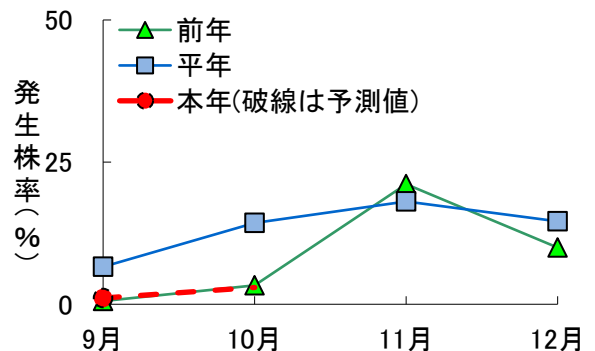
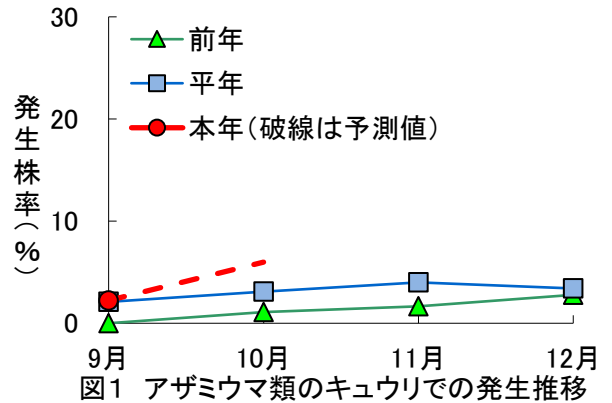


図1 キュウリべと病の発生推移

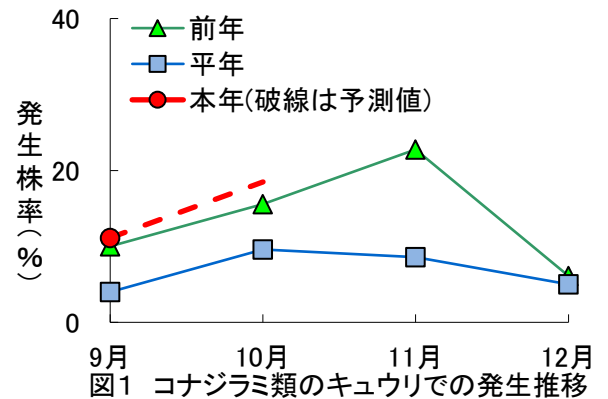
2. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1 参照）
発生株率：2.2%（平年 2.1%、前年 0%）
平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）
 - ② 10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。



3. コナジラミ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1 参照）
発生株率：11.1%（平年 4.0%、前年 10.0%）
平年比：多（+） 前年比：並（±）
 - ② 10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。



アスパラガス

定期調査：7 圃場
調査日：9月15～22日

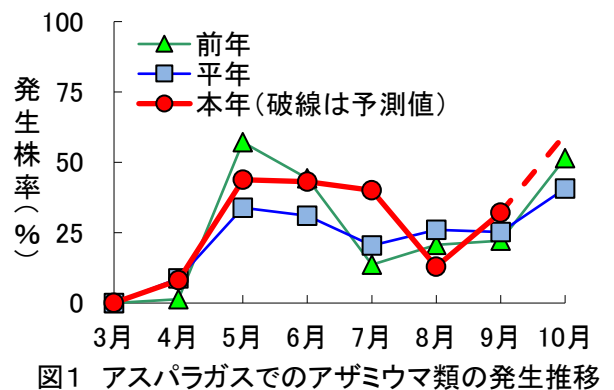
1. アザミウマ類

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1 参照）
発生株率：32.1%（平年 25.2%、前年 22.1%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）
 - ② 10月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 虫見板への払い落とし等を行い、発生状況に注意する。
 - (2) 多発生圃場では、約7日間隔で2～3回薬剤防除を行う。



定期調査圃場の様子



2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：62.9%（平年44.0%、前年91.4%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：少（-）

(2) 10月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

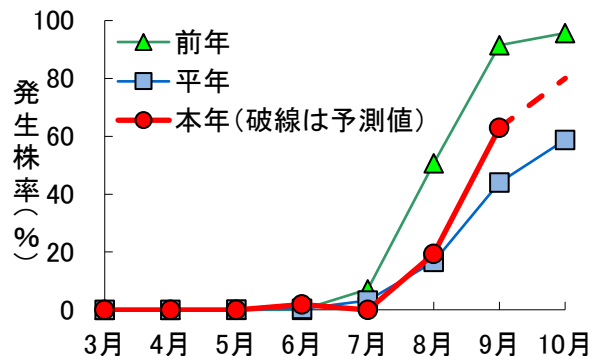


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

野菜共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1,2参照）

作物名	食害株率 (%)	平年比	前年比	平年値 (%)	前年値 (%)
イチゴ	1.3	並（±）	少（-）	1.1	3.8
アスパラガス	0	並（±）	並（±）	0.3	0

②フェロモントラップによるハモンヨトウの9月の誘殺数は、平年よりやや少ない（図3）。（-～±）

③フェロモントラップによるオオタバコガの9月の誘殺数は、平年よりやや少ない（図4）。（±）

④フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの9月の誘殺数は、平年より多い（図5）。（+）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生程度は、圃場毎に大きく異なるため、必ず圃場での発生状況を確認する。

(2) 薬剤防除に当たっては、使用方法（収穫前日数等）を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

(3) 幼虫は、齢が進むと薬剤の防除効果が上がりにくいいため、若齢幼虫期に防除を行う。

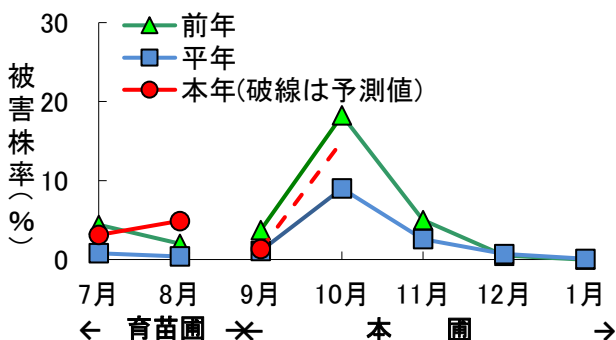


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

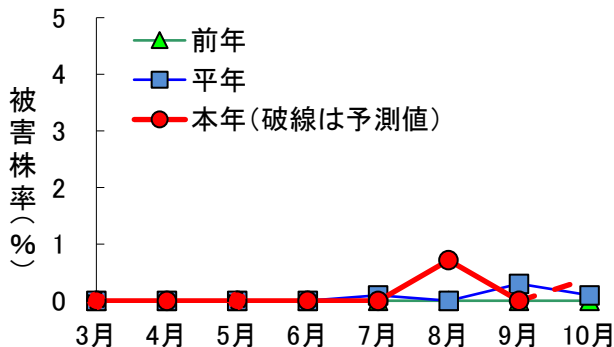


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

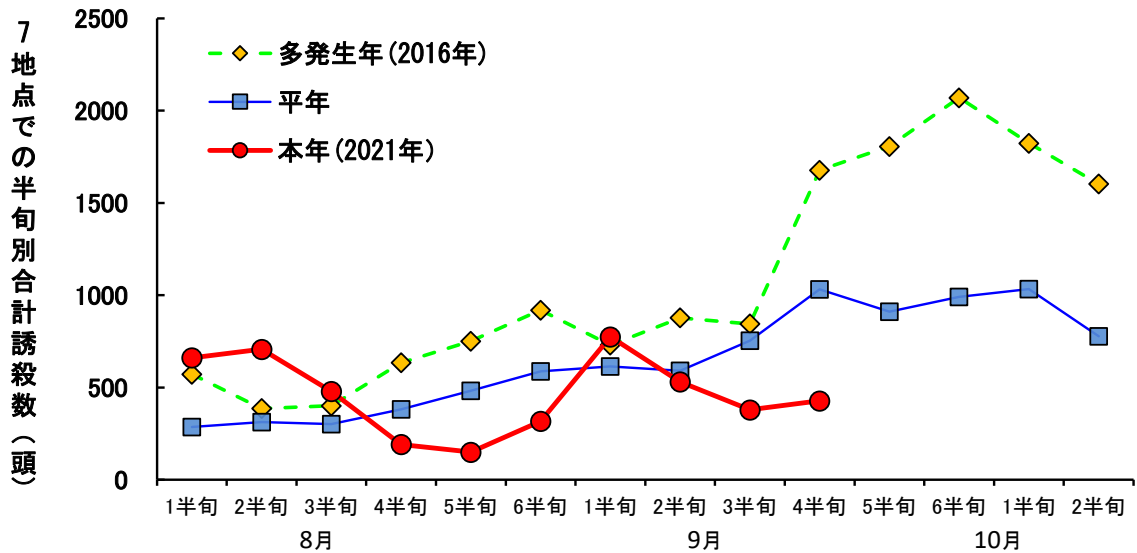


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数（9月4半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内7地点の平均誘殺数（ただし8月4半旬までは8地点の平均誘殺数））

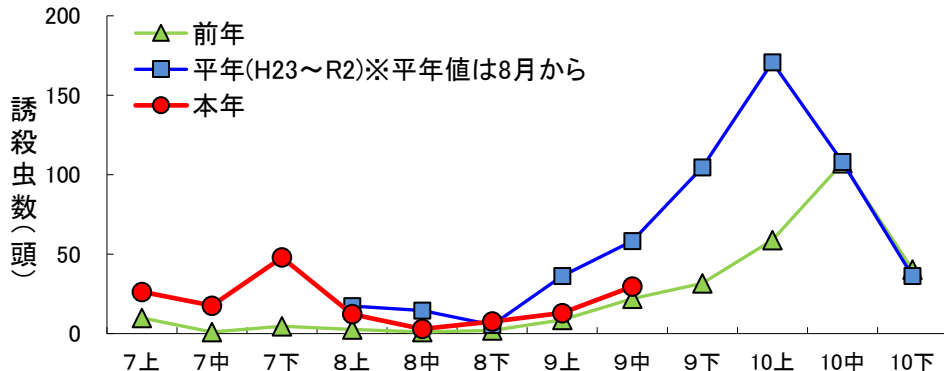


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数
（川副町3地点の平均・病害虫防除員2地点、農業試験研究センター1地点）

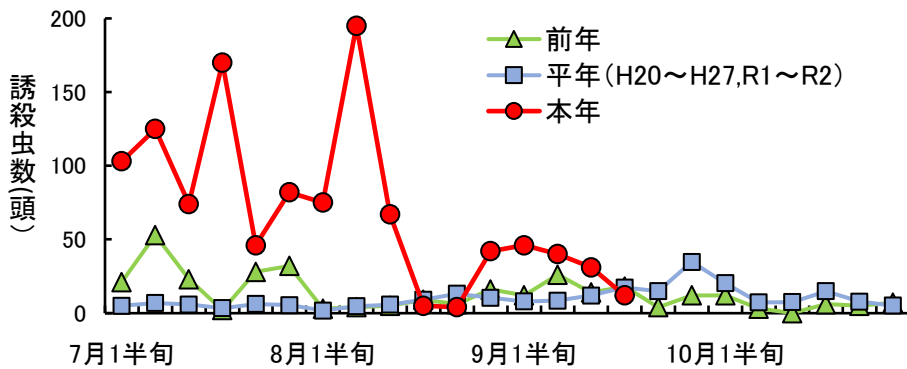


図5 フェロモントラップによるシロイモジヨトウの半旬別誘殺数
（川副町・農業試験研究センター調査）

1. カメモシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 予察灯（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

② フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) ヒノキ毬果における寄生数（図3、表1参照、8月31日調査）

成幼虫数平均：6.5頭（平年11.3頭、前年3.4頭）、平年比：やや少（-〜±）

(3) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 合成ピレスロイド系薬剤やネオニコチノイド系薬剤の吸汁阻止効果は10日程度であるが、特にネオニコチノイド系薬剤は積算降雨量が30~50mmに達した時点を目安に再散布を行う。

(2) 合成ピレスロイド系薬剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これらの発生状況に注意して適切に防除対策を行う。

(3) その他については、特記事項を参照する。

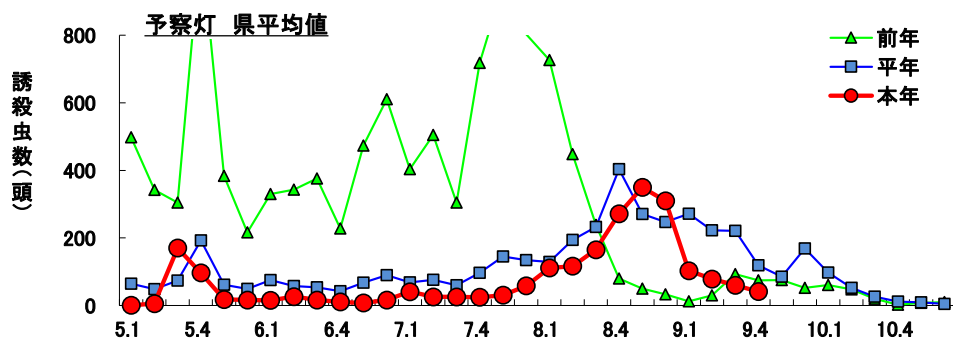


図1 予察灯（佐賀市、太良町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査））による果樹カメモシ類の平均誘殺数の推移

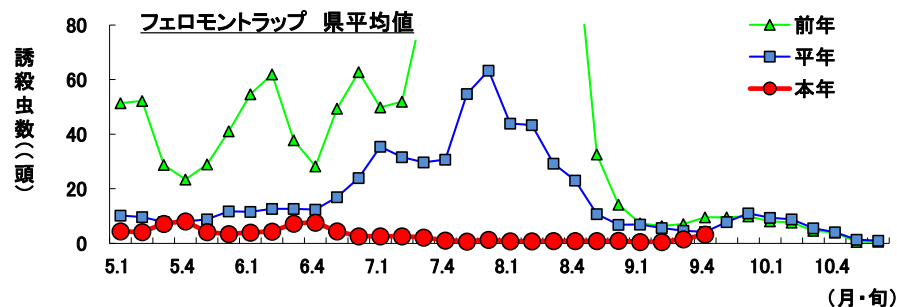


図2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査）、唐津市鎮西町（上場営農センター調査））による果樹カメモシ類の平均誘殺数の推移

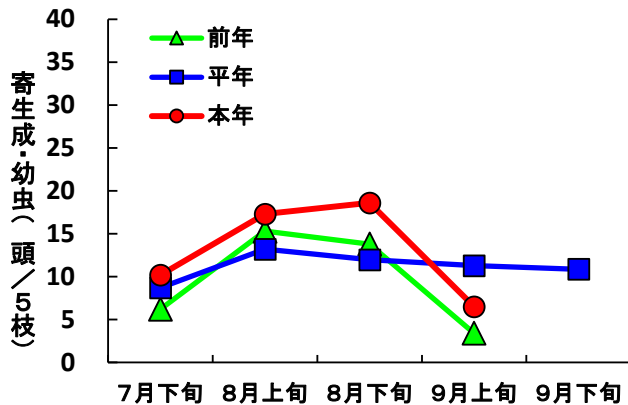


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数 (図3に関する地点別の状況)

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生状況 1)			ヒノキ毬果における寄生状況 1)			ヒノキ毬果における寄生状況 1)			ヒノキ毬果における寄生状況 1)			ヒノキ毬果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾
		7月下旬			8月上旬			8月中下旬			9月上旬				
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計		
1	小 城市	0	0	0	-	-	-	0	0	0	1	1	2	中	4.8
2	唐 津 市 1	3	2	5	-	-	-	1	1	2	-	-	-	やや少	30.0
3	唐 津 市 2	7	0	7	-	-	-	10	0	10	-	-	-	中	4.3
4	唐 津 市 3	10	43	53	-	-	-	9	15	24	-	-	-	中	30.0
5	伊 万 里 市 1	2	3	5	1	8	9	2	2	4	-	-	-	少	30.0
6	伊 万 里 市 2	3	0	3	3	11	14	1	1	2	-	-	-	少	30.0
7	白 石 町	11	0	11	12	13	25	11	41	52	5	1	6	中	14.2
8	鹿 島 市 1	7	6	13	10	6	16	7	34	41	8	2	10	やや少	12.6
9	鹿 島 市 2	4	2	6	12	34	46	18	16	34	4	3	7	中	9.1
10	太 良 町 1	0	3	3	3	2	5	-	-	-	4	3	7	やや少	16.8
11	太 良 町 2	3	3	6	6	0	6	10	7	17	2	5	7	中	7.7
	平 均	4.5	5.6	10.2	6.7	10.6	17.3	6.9	11.7	18.6	4.0	2.5	6.5	やや少	17.2
	平 年	-	-	8.7	-	-	13.2	-	-	12.0	-	-	11.3	-	16.6
	前年 (R2年)	6.1	0.1	6.2	5.1	10.2	15.3	5.0	8.8	13.8	1.6	1.8	3.4	やや少	21.3

1) たたき落としによる調査

2) ヒノキ毬果着果程度: 福岡農総試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少: ほとんど結実が見あたらない
- ・少: 梢頭部にわずかに結実
- ・やや少: 梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中: 梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多: 梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多: 梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多: 梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

3) 口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

カンキツ

定期調査: 8 圃場

調査日: 9月17日~22日

1. ミカンハダニ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率: 0.5% (平年 1.2%、前年 0.1%)

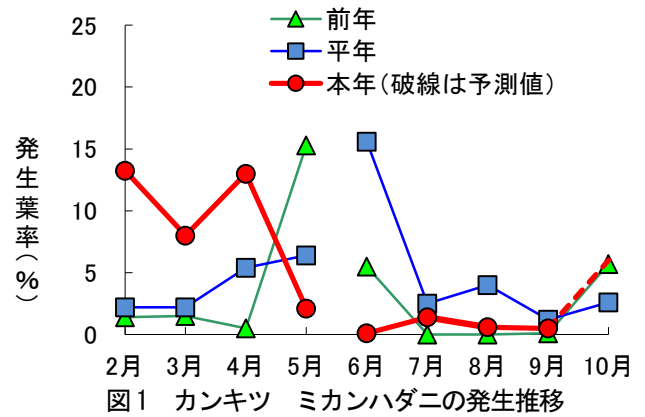
平年比: 並 < 土> 前年比: 並 < 土>



定期調査圃場の様子

- (2) 10月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈+〉

- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 発生が見られる圃場、特に収穫まで期間のある晩生品種等では低密度時からの防除を徹底する。
(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。



キク

定期調査：8圃場
調査日：9月15～22日

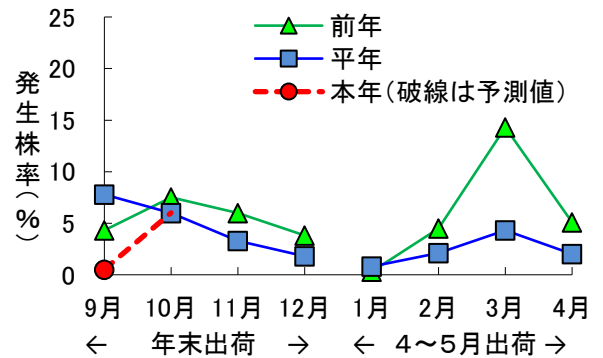
[【概要に戻る】](#)

1. アザミウマ類 (クダハアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)



定期調査圃場の様子

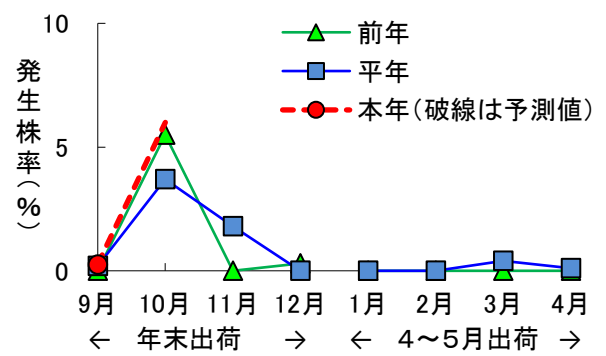
- 1) 予報の内容
発生量：平年並 (前年並)
- 2) 予報の根拠
(1) 発生の現況
① 定期調査 (図1参照)
発生株率 0.5% (平年 7.8%、前年 4.3%)
平年比：少〈-〉 前年比：やや少〈-〜±〉
- (2) 10月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈+〉



- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 発生状況をよく確認し、低密度時からの防除を徹底する。本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。
(2) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。
(3) ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病 (TSWV)・茎えそ病 (CSNV) のウイルスを媒介する。発病株を認めた場合は速やかに取り除き、媒介虫に対する防除を徹底する。

2. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い (前年並)
- 2) 予報の根拠
(1) 発生の現況
① 定期調査 (図1参照)
発生株率 0.3% (平年 0.2%、前年 0%)
平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉
- (2) 10月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈+〉



- 3) 防除上注意すべき事項
(1) ウイルス病を媒介するので、発生に注意し早めに防除する。

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

発生株率0%（平年1.4%、前年0.3%）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

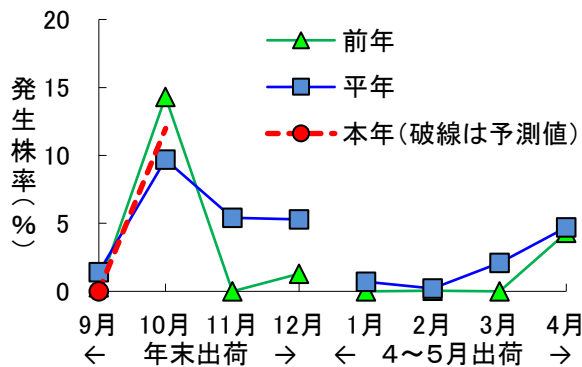


図1 ハダニ類のキュウでの発生推移

4. チョウ目害虫（ハモンヨトウ、材バコガ、シイモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

被害株率0.8%（平年0.9%、前年1.8%）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-〜±）

②フェロモントラップによる誘殺数

野菜共通の項参照

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 野菜共通の項を参照。
- (2) その他については、特記事項を参照。

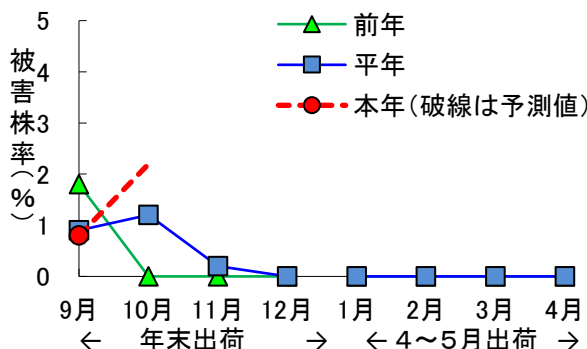


図1 チョウ目害虫によるキュウでの被害株率の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
 〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
 TEL (0952)45 - 8153 FAX (0952)45 - 5085
 Mail nougyougi_jutsu@pref.saga.lg.jp
 ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

